

動詞の法の比較に関する一考察

著者	東 哲史
雑誌名	研究紀要
巻	40
ページ	135-152
発行年	2017-02-25
出版者	東京音楽大学
ISSN	0286-1518
URL	http://id.nii.ac.jp/1300/00001131/



動詞の法の比較に関する一考察

東 哲 史

0. はじめに

本稿では、イタリア語とフランス語の条件法の比較をおこす。さらにこの比較を材料として、動詞の法の意味比較に関わる諸問題点の考察もわずかではあるがおこなう。

第一部では、イタリア語の条件法がフランス語の条件法よりも頻繁に使われる、さらには、イタリア語の条件法はフランス語の条件法よりも広い範囲の意味を表す、という過去の研究文献の指摘を取り上げて再検討する。これらの研究は、イタリア語作品とそのフランス語への翻訳の例文をいくつか取り出して比較する、という方法を取っている。

第二部では、最近の研究文献から、イタリア語とフランス語の条件法の比較の一例を概観する。すると、第一部とは逆に、フランス語では条件法で言える内容が、イタリア語では条件法で言えない場合があるということが確認できる。これらの研究は、第一部で検討した研究文献のように、既存の文学作品とその翻訳書から例文を取り出すという方法ではなく、まず理論的なカテゴリー分けを行い、それに適した実例を作成して比較検討するという方法を取っている。

第三部では、本稿の筆者が、フランス語小説とそのイタリア語訳五種をコーパスとして集めた条件法のデータを検討する。コーパス全体に渡って動詞を数えることにより、イタリア語の条件法はフランス語の条件法より出現回数が多いということが判明した。しかも、それが五種のイタリア語訳すべてにおいて確認できたので、非常に信頼性の高いデータであると言える。このデータを第一部と第二部の考察結果と合わせて、どういった結論が導き出せるか考えてみる。

1. 第一部

Mourin 1956 によれば、イタリア語では条件法現在形が他のロマンス語よりも頻繁に使われる。Mourin は、イタリアの小説や戯曲の条件法現在形の用例を取り上げ、それらの条件法はフランス語に訳される際には条件法にはならぬであろう、という。第一部では、まず Mourin の挙げるいくつかの用例のなかから、L. Pirandello, *Il fu Mattia Pascal* (L. ピランデッロ作『故マッティーア・パスカル』1904年) の用例を再検討してみる。この小説は主人公パスカルの一人称視点で描かれる。彼は旅先で新聞を読み、故郷で発見された溺死体が自分であると誤認されたことを知り、つまりは法的には死亡したことにされたのに乗じ、過去のしがらみを振り捨てて別人として自由に生きていくことにする。文脈の理解を容易にするために、はじめに米川良夫の訳をやや長めに引用しておく。ただし、引用の都合上、わずかに手を加えたところがある。

※以下、例文には (1) から始まる通し番号をつけていくことにする。

(1) 『故マッティーア・パスカル』第三章

初めに私は、いささかあわてて、両親をとともに識っていると言ってしまった。しかし私は、父のほうは覚えてはいない。父が死んだとき、私は五歳の半ばだった。父は商用のため、自分の帆船でコルシカにいったきり帰ってこなかった。マラリア熱で、三日の患いののち、三十八歳で死んでしまったのだ。それでも、残された妻と二人の息子—マッティーア（つまり私、ということになるろうし、また私のことだった）と、私より二歳上のロベルト—には、不自由はなかった。

イタリア語原文

Lasciò tuttavia nell'agiatezza la moglie e i due figli: Mattia (che sarei io, e fui) e Roberto, maggiore di me di due anni.

Mourin は、このイタリア語の条件法 che sarei io をフランス語に訳すならば条件法ではなく ce doit être moi という形を選ぶところであろう、という。このようなイタリア語の条件法の例 (Mourin によれば、フランス語なら条件法にはならぬ例) を積み重ねることにより、イタリア語の条件法はフランス語の条件法よりも頻繁に使われる、と主張するのであるが、この方法は厳密なやり方とはいえないと思う。

筆者の手元には、この小説のフランス語訳が二種ある (Henry Bigot 訳, 1910 ; Alain

Sarrabayrouse 訳, 1994)。この箇所をみると、以下のようになんと二者とも条件法で訳しているのである。

Bigot 訳, p16

Il lasissait toutefois dans l'aisance sa femme et ses deux fils: Mathias (ce serait moi, et ce fut moi) et Robert, mon aîné de deux ans.

Sarrabayrouse 訳, p45

Il laissa toutefois dans l'aisance sa femme et ses deux enfants : Mattia (ce serait, et ce fut moi) et Roberto, mon aîné de deux ans.

Louis Mourin はロマンス語学の諸領域で大きな業績をあげた碩学であるが、それでも「この小説のこの箇所はフランス語では条件法にならない」という意見はそのまま受け入れるわけにいかないようである。そもそも、小説の中の用例は複雑な文脈の中で成立するものであり、個別に取り出して条件法で言えるのかどうかを問題にしても、見解が分かれてしまうのはやむを得ぬことかもしれない。そして、それらの用例の考察に基づいて、イタリア語の条件法はフランス語の条件法よりも広い範囲の意味をあらわすという結論まで導くのは危険であろう。

Mourin は他にも *Il fu Mattia Pascal* の条件法現在形を二つ挙げているのでそれらも見ておこう。

(2) 『故マッティーア・パスカル』第四章

私はこの第一回訪問の印象をミーノに伝えた。私はまたロミルダのことをたいそう熱をこめて話したので、彼は、彼女が私にも気に入って、私の同意を得ることができたのがうれしくてたまらず、たちまち有頂天になった。

そこで私は彼に、どうする気なのかたずねた。母親は、確かに鬼婆アといった様子だが、娘のほうは、誓ってもいい、真面目な娘だった。マラーニャの卑劣な目論見^{もくろみ}については疑いの余地はない。したがって、どんなことをしても、大至急、娘を救いさなければならなかった。「でも、どうするんだい？」と、ポミーノがきいた。彼は私の話に喰いつくように聞き入っていた。

「どうするって？ まあ、考えてみようぜ。何よりもまず、いろいろ確かめなくっちゃな。探りをいれて、よく研究するのさ。そんな、いきなり決めろなんて、できっこないだろう。まあ、まかしておけよ。うまくやってやるさ。この冒険は気に入ったぜ」

「おいおい……でも……」と、ポミーノはそのとき、私がこんなに夢中になっているのを見て、急に怖^おじ気^けづいて、おずおずと疑問を挿しはさんだ。「もしかしたら、君は……彼女と結婚す

るってことを言っているのかい?」

「今のところは、ぼくはまだ何とも言わないね。もしかしたら、怖くなったのかい?」

「そんなことないさ、なぜだい?」

イタリア語原文

— Tu diresti forse... sposarla?

イタリア語原文では動詞 dire「言う」が条件法で現れる。Mourin はフランス語であれば直説法未来形を使わねばならぬところだ、という。

Bigot 訳, p9

— Voudrais-tu dire?... l'épouser?

動詞 dire「言う」は不定法となり、法助動詞 vouloir が条件法で表れている。イタリア語原文にはあった副詞 forse「多分」はなくなってしまった。これを Pirandello の原文と比較するのは簡単ではない。確かにこのフランス語訳もイタリア語原文も条件法である、とも言えるが、法助動詞 vouloir は読んで字のごとくそれ自体が特殊な法の一つであると思わせる。原文も訳文も条件法である、と単純に済ましてしまうわけにはいかない例である。

Sarrabayrouse 訳, p66

— Tu veux peut-être dire... l'épouser?

動詞 dire「言う」は不定法となり、法助動詞 vouloir が直説法で現れている。この例をもってイタリア語の条件法がフランス語では直説法になっている、と単純に言い切ってしまうのは不当であろう。

(3)『故マッティーア・パスカル』第九章

そこで、気晴らしに、私はあのわが家の前に、大きな菓子パンを抱えて立っている自分の姿を想像して、笑ってみようとした。

《ごめんください！ロミルダ・ペスカトーレ＝パスカル未亡人と、マリアンナ・ドンディ＝ペスカトーレ未亡人とは、まだこちらにおいででしょうか？》

《はい、おりますが、どなたさまでしょう？》

《私は、パスカル未亡人の亡くなられた旦那さまで、昨年、水死いたしましたあの気の毒なお方というわけなんですがね、はい、私は一家団樂のお祝いをさせていただこうと、お偉い方々のお許しを得て、あの世から急いで飛んでまいりました。はい、ご心配なく、またすぐに退散いたします》

イタリア語原文

« — Io sarei il defunto marito della signora Pascal, quel povero galantuomo morto l'altr'anno, annegato.

Mourin がここで提案する仏訳は、je suis, comme qui dirait, ... である。挿入節 *comme qui dirait* が直説法 suis による断定をやわらげる効果をもっている。

Bigot 訳, p128

— Je suis le défunt mari de Mme Pascal, ce pauvre brave homme noyé l'année dernière.

Sarrabayrouse 訳, p143

« — Disons que je suis le défunt mari de madame Pascal, ce pauvre homme mort l'année dernière, le noyé.

イタリア語原文の条件法 sarei を仏訳はともに直説法 suis にしている。これは Mourin の主張にとって都合のよい例ということになる。(但し、Sarrabayrouse 訳では、主節の *Disons* があり、直説法 suis は従属節に入っていることに留意する必要がある。*Disons* はおそらく断定をやわらげる効果をもつ。)

本稿の筆者はこの小説のイタリア語原文とフランス語訳の条件法をすべて調べてはいないが、Mourin の主張の逆を示す用例（フランス語訳の条件法がイタリア語原文の直説法に対応している例）が見つかる可能性も考えておく必要はあるだろう。

ここで、町田 1983 のイタリア語の条件法過去形に関する論考に触れねばならない。

ロマンス諸語では（ルーマニア語を除く）、従属節で過去未来を表すために条件法現在形が使われるが、イタリア語ではなぜか条件法過去形が使われる。

(4) 彼は、私にすぐ手紙を書く、と私に言った (Tekavčić, p371)

フランス語 il me dit qu'il m'écrivait tout de suite 条件法現在形

スペイン語 me dijo que me escribiría luego 条件法現在形

イタリア語 mi disse che mi avrebbe scritto subito 条件法過去形

同じくラテン語を源としながら、なぜイタリア語のみ現在形ではなく過去形を使うに至ったのか。これは多くのロマンス語学者が扱った重要課題であるが、町田はこの問題に取り組み、イタリア語の条件法がフランス語などの条件法に比べてより広い範囲の意味を表したという点にその理由を求める。(町田の議論は長大な射程を持っているのだが、その道筋全体にはここ

では踏み込まず、本稿の内容に直接関わる部分にのみ触れる。) 町田は、上で紹介した Mourin が挙げる例も利用した上で、さらに加えて他のイタリア語作品とそのフランス語訳の比較をおこない、イタリア語の条件法にフランス語の直説法が対応している例がいくつも見られるという。

念のため、正確に引用しておこう。

Mourin, p9 によると：per attenuare un'affermazione, l'italiano usa più spesso il condizionale semplice che altre lingue romanze. 「イタリア語では断定を和らげるために他のロマンス語よりも頻繁に条件法現在形が使われる。」

町田, p111 によると：「イタリア語の条件法はフランス語の条件法よりも意味的に直説法の領域と重なる部分が多い。」これはどういうことか？ 直説法は話者が確信をもって物事を述べるときに使われるが、それに対して、条件法は話者が確実ではないと感じていることを述べるときに使われる。イタリア語の条件法はフランス語の条件法に比べて、確実性がより高いと感じられるところでも使われる、というのが町田の意見であり、その根拠は、翻訳においてイタリア語の条件法にフランス語の直説法が対応している例がよく見いだされる、ということである。(上記の引用では、Mourin はより「頻繁」であると言っており、「頻度」を考えているようである。町田はイタリア語の条件法の意味が覆う範囲が「大きい」と言っている。この二つの概念は区別すべきこともあるかもしれない。滅多に現れない用法の種類が多い場合は、覆う意味の範囲は大きくなるのかもしれないが、頻度は高くないであろう。)

第一部の最後に確認しておきたい。上で検討したフランス語訳から分かるのは、小説の個々の用例を如何に訳すべきか、という視点・方法でフランス語とイタリア語の条件法の比較を行うと、個々の用例についていろいろな解釈が出てきてしまう、ということである。本稿では、このような訳者の意見のずれの影響をおさえ、より客観的かつ精密な結果を得るための方策として、一定のコーパス(フランス語小説とそのイタリア語訳)に現れる条件法をすべて数える、という手段をとった。さらにイタリア語訳は五種類を用意し、精度を高める工夫を施した。その結果は本稿の第三部で扱う。

2. 第二部

近年はロマンス諸語の法について意味論的カテゴリーと統辞的基準に基づく比較がなされている。急速に進展・変化している分野であるので、本稿ではその成果のごく一部を断片的に紹介するに過ぎない。検討の対象となる用例は、第一部で見たような小説の複雑な文脈のなかに存在するものは少なく、いわば対照研究に都合のよい単純な形で作られたものが多い。

- (10) [Suonano alla porta] Sarà il postino? 直説法未来形 (Squartini 2010)
[戸を叩く者がいる] 郵便配達人だろうか？

ではイタリア語の条件法はどうだろうか？ フランス語の条件法も並べて比較してみよう。

- (11) Suonano. Sarà Géraldine? 直説法未来形 (Squartini 2008)
(12) *Suonano. Sarebbe Géraldine? 条件法現在形 (Squartini 2008)
(13) On sonne; serait-ce Géraldine? 条件法現在形 (Squartini 2008)
戸を叩く者がいる。ジェラルディーンだろうか？

イタリア語の条件法の疑問文 (12) が非文となっていることに注目されたい。フランス語 (13) では条件法で正しい。

これらの一連の比較から明らかであるが、フランス語では条件法で言えるがイタリア語ではそうではない場合がある、ということになる。つまりは、上述のような限定された範囲内のことではあるがフランス語の条件法の方が表す意味の幅が広いということである。

直説法現在も加えて検討してみよう。フランス語では推量の意味の疑問文であれば直説法現在でも条件法現在形でも使える。

- (14) Luc est-il à Paris? 直説法現在形 (Squartini 2010)
(15) Luc serait-il à Paris? 条件法現在形 (Squartini 2010)
リュックはパリにいるのだろうか？

この二つの例からすると、ここではフランス語の直説法と条件法の表す意味は少なくともある程度は重なっているといえるだろう。Squartini は例を挙げていないが、イタリア語でもこの疑問文は直説法現在形で言えるはずである。上で見たように、イタリア語ではこのような推量は条件法では言えず、直説法未来形が担うから、イタリア語の直説法と条件法の表す意味はここでは重ならない。(すると、第一部で見た町田の見解「イタリア語の条件法はフランス語の条件法よりも意味的に直説法の領域と重なる部分が大きい」はもしかしたら微修正が必要かもしれない。しかし、(11) (12) (13) を利用して確認したことは、疑問文という環境に限った話であるから、そのような修正は必要ないかもしれない。これはさらに精密な検討を要する課題である。なお、第三部の (30) に関しても似たようなことが言える。(30) では疑問文においてフランス語原文の条件法を直説法に訳しているイタリア語版が三種ある。)

ロマンス諸語（仏・伊・西・葡）の条件法と直説法未来形の比較を行っている Squartini 2004, pp82-83 の表から、フランス語とイタリア語の部分のみ、そのまま抜き出すと以下のようになる¹。

〔表 1〕

条件法				
	時制	推量		伝聞
フランス語	+P	+/-P	+D	+/-P
イタリア語	+P	ナシ	ナシ	+/-P

〔表 2〕

直説法未来形				
	時制	推量		伝聞
フランス語	-P	+/-P	-D	ナシ
イタリア語	-P	+/-P	+/-D	ナシ

この表の意味を、ごく部分的にはあるが具体例によって確認しておこう。弁別特徴 P は過去 (passato) を表す。過去の意味のみで使われるなら +P、過去の意味を表さない（つまり現在または未来の意味のみ）なら -P、過去・現在・未来のいずれの意味でも使われるなら +/-P となる。なお、この表の中では、条件法でも直説法未来形でも、単純形と完了形の区別はなされていない。単純形と完了形の使い分けは状況に応じて適切になされる、ということである。

直説法未来形は時制としては過去の意味を表さないので -P となるのは当然である。例文は

1 この表は、いくつかの点で批判の余地があると思う。例えば、フランス語の条件法の推量用法の特徴は +D となっている。これは、「疑問文にのみ現れる」ということであるが、文法書などをみると、肯定文で条件法が推量の意味で使われていると思われる次のような例がすぐに見つかる。

朝倉季雄『新フランス文法事典』p141

推測・疑惑 (conditionnel de probabilité) :

J'aurais attrapé froid mardi en sortant du théâtre. (Maupassant, Bel-Ami)

火曜日に芝居から出たとき、風邪をひいたらしい

Squartini の論文中で、推量の意味の肯定文で条件法が不可となっている（アスタリスクがついている）例を探したが、見つからなかった。ただ、次のような例があった。

^{??}Max serait là: Je vois sa voiture. 条件法現在形 (Squartini 2008, 2010)

マックスはいるようだ。私には彼の車が見える。

この例は、疑問符が二つもついていることから分かるように、正しい文として受け入れるのは難しいようではある。

もしかしたら、フランス語の条件法は、Squartini が整理した図式よりもさらに広い範囲の意味を表す、ということになるのかもしれない。それは本稿の議論の方向と結論を損なうことではないが、今後、より精密に解明されねばならぬことである。

必要なだろう。条件法は時制としては過去未来を表すので +P となる。例文を再掲しておく。

- (4) 「彼は、私にすぐ手紙を書く、と私に言った」 (Tekavčić, p371)
フランス語 il me dit qu'il m'écrivait tout de suite 条件法現在形
イタリア語 mi disse che mi avrebbe scritto subito 条件法過去形

伝聞 (riportivo) は本稿の内容とは直接の関わりがない。ただ例文を見てその意味を確認しておこう。

- (16) Secondo le ultime informazioni il presidente si sarebbe dimesso ieri.
条件法過去形 (Squartini 2004)

最新の情報によれば、大統領は昨日辞任したようだ。

D は疑問 (dubitativo) を表す。疑問文にのみ現れるのならば +D となる。例えばフランス語の直説法未来完了形の推量用法をみて見よう。例文 (6) を再掲する。

- (6) Pierre n'est pas là. Il aura manqué le train. 直説法未来完了形 (Squartini 2010)
ピエールがいない。電車に乗り遅れたのだらう。

完了形によって過去であることが表現されている。これを疑問文にすると (7) のように非文となるから、直説法未来 (完了) 形の弁別特徴は -D である。

- (7) *Pierre n'est pas là. Est-ce qu'il aura manqué le train?
直説法未来完了形 (Squartini 2010)

ピエールがいない。電車に乗り遅れたのだろうか？

イタリア語では推量は直説法未来形が担う。

- (17) Adesso saranno le quattro. 直説法未来形 (Squartini 2004)
今は四時だろう。

- (18) Saranno state le quattro quando lo abbiamo incontrato.
直説法未来完了形 (Squartini 2004)

私たちが彼に出会ったときは、四時だったであろう。

(19) Le finestre sono tutte chiuse. Sarà già partito? 直説法未来完了形 (Squartini 2004)
窓がすべて閉じられている。(彼は) もう出発したのだろうか?

(19) を条件法にすると (20) のように非文となってしまう。

(20) *Le finestre sono tutte chiuse. Sarebbe già partito? 条件法過去形 (Squartini 2004)
窓がすべて閉じられている。(彼は) もう出発したのだろうか?

本稿にとって重要な点は、イタリア語の条件法の推量用法が〔表1〕では存在しないことである。イタリア語では推量の意味は全面的に（過去・現在・未来のいずれでも、肯定文でも疑問文でも）直説法未来形が担っている。この点ではフランス語の条件法の方が表す意味の範囲が広い、ということになる。

さらに、フランス語の条件法とイタリア語の条件法の間関係を見てみよう。

(21) Jeanne d'Arc, Richelieu, Louis XIV, Carnot, Napoléon, Gambetta, Poincaré, Clemenceau, le Maréchal Foch auraient-ils jamais consenti à livrer toutes les armes de la France à ses ennemis pour qu'ils puissent s'en servir contre ses alliés? (Charles de Gaulle, *Discours et messages*) 条件法過去形 (Martin 1981 及び Squartini 2004)
ジャンヌ・ダルク、リシュリユー、ルイ 14 世、カルノー、ナポレオン、ガンベタ、ポワンカレ、クレマンソー、フォッシュ元帥が、フランスの全武器を自分の敵に引き渡して、敵が自分の同盟国に向かってその武器を使用することを認める、などということがあり得ただろうか?

(22) Auraient-ils consenti à livrer les armes? («j'ai des raisons de le penser») 条件法過去形 (Martin, 1981 及び Squartini, 2004)
彼らは武器を引き渡すことを認めたであろうか? (私にはそう考えるべき理由がある。)

Squartini は Martin のこの二つの例文を挙げて、イタリア語に訳すとすれば (21) は条件法が使用可能であるが、(22) は条件法で訳すことができない、という。Martin は条件法を二種に区別して、(21) は Conditionnel des mondes possibles、(22) は Conditionnel Univers である、という。Martin のこの概念区分はきわめて抽象的かつ難解であり、ここではその内容に立ち入らない。(21) はジャンヌ・ダルク等への言及から明らかだが歴史上の具体的事実に関する仮定であり、(22) はそうではない、という点が重要であるようだ。) 本稿にとって意味があるのは、ある種のフランス語の条件法はイタリア語の条件法には訳せない、という

Squartini の指摘である。(但し、このような抽象的概念による条件法の用法の区別がイタリア人一般の言語感覚と一致するかどうかはさらに検証しなければならないであろう。)

第二部の最後に、Squartini の推量 (inferenza) という概念はやや曖昧であることは指摘しておかねばならない²。

(23) Sarebbe partito, se avesse saputo quello che era successo?

条件法過去形 (Squartini 2004)

(彼は) 仮に起こった事を知っていたとしたら、出発していたであろうか?

Squartini が認める通り、(23) のような条件文 (前提節 + 帰結節) の帰結節では条件法が現れる。あるいは (24) のような伝聞 (riportivo) の意味でも条件法が現れる。

(24) Quindi, secondo te, sarebbe già partito?

条件法過去形 (Squartini 2004)

すると、君の意見によれば、(彼は) もう出発したということかい?

(23) で前提節が省略され、あるいは (24) で副詞句が省略されたら (25) のようになるであろう。

(25) Sarebbe (già) partito?

条件法過去形

(彼は) もう出発しただろうか?

(20) *Le finestre sono tutte chiuse. Sarebbe già partito? は非文とされていたことを思い出していただきたい。文脈のみによって、ある文 (例えば (25)) が条件文の帰結節なのか、伝聞なのか、あるいは推量なのか常に明確に区別できるとは限らないであろう。イタリア語の条件法の推量用法は存在しない、と単純に言い切ってよいのかどうかは、まだ検討すべきであると思う。これについては第三部でまた触れる。ともかく、[表1] [表2] は条件法と未来形の意味をきわめて大まかに捉えているに過ぎないので、その点に留意は必要であろう。

2 Squartini によると、(23) のような条件文には直説法未来形は現れ得ないので、(23) は条件法に限られた用法である。また、(24) の伝聞を表す条件法についても同様である。故に、直説法未来形と条件法の比較を目的とする [表1] [表2] には含めない、ということである。その限りでは Squartini の態度は正しいかもしれない。しかし、条件法の表す意味全体を捉えようとするなら、不十分な扱い方ということになるだろう。

3. 第三部

第一部では、イタリア語作品とそのフランス語訳の対応を一例ずつ検討する先行研究の内容を振り返ってみた。第二部では統辞的・意味論的基準による条件法の用法の整理を行った。第三部では、André Gide, *Les Caves du Vatican* (A. ジード作『法王庁の抜け穴』1914年)とそのイタリア語訳五種をコーパスとして、条件法がどのくらい使われているかを調べ、その結果を第一部、第二部の考察と合わせて検討する。

この小説は全体で五章に分かれるが、第一章に現れる条件法をすべて抜き出してみた。これは今まで取り上げられることのなかった実証的データである。残念ながら、調査はこの作品全体には及んでいないが、それでも役に立つ量のコーパスになっていると思う。以下、この〔表3〕と、ジードの実例を検討していこう。

〔表3〕第一章に現れる条件法（及び条件法過去第二形）の数

	条件法現在形	条件法過去形	条件法過去第二形	合計
仏語本文	34	7	11	34+7+11=52
Gi 訳	29	30		29+30=59
DB 訳	29	27		29+27=56
O 訳	25	28		25+28=53
SV 訳	28	30		28+30=58
G 訳	36	34		36+34=70
伊語訳平均	29.4	29.8		59.2

〔表3〕に関して、以下の諸点を述べておかねばならない。

まず、フランス語の条件文の帰結節（及びそれに相当する意味のところ）で用いられる接続法大過去の形、すなわち条件法過去第二形 (*la seconde forme du conditionnel passé*) について説明しておく。これは、表面に現れる形は接続法大過去形だがその意味するところが条件法過去形と同等という文法形式である。実例として二つだけ挙げておく。

(26) A la voix on eût dit un ange; c'était un aide-bourreau. 条件法過去第二形

（その少年は）声だけ聴くとまるで天使のようであったが、実のところは死刑執行人の助手（なみに残酷）であった。

(26) を五種のイタリア語版はすべて条件法過去形で訳している。

(27) Elle n'eût pu atteindre à la niche, placée hors de la portée des passants;

条件法過去第二形

通行人の手の及ばぬところにある^{へきがん}壁龕であるから、彼女も届かなかったであろう。

(27) も五種のイタリア語版はやはりすべて条件法過去形で訳している。

この条件法過去第二形は外見が接続法であってもその機能が条件法過去形と同等であるから、フランス語の条件法の出現回数を数える際には計上しておくべきであろう。

次に、フランス語原文の条件法現在形は、イタリア語訳五種の平均よりも多く出現していることについて述べる。これは、第一部ですで見たと (4) で説明できる。過去未来を表すためにフランス語が条件法現在形を使うところでイタリア語は条件法現在形ではなく条件法過去形を使うので、イタリア語の条件法現在形は相対的に少なくなっている。そして、その分だけイタリア語の条件法過去形の数が多くなっている。

イタリア語訳は、どの訳をとってもフランス語原文よりも条件法の出現回数が多い。五種の訳を調べてこのような結果が出ていれば、客観的にイタリア語はフランス語よりも条件法を頻繁に使う、と言ってよいと思う。(但し、もっとコーパスを大きくした方がよいのは言うまでもない。それは今後の課題としておく。) それから、イタリア語訳相互の間での差がかなり大きい、ということにも注目すべきである。最も条件法の使用回数が多かったのが G 訳で 70 回、最も少なかったのが O 訳で 53 回であるが、これはフランス語原文の 52 回とほとんど変わらぬ数字である。しかし、それでも [表 3] は全体として、イタリア語はフランス語よりも条件法を頻繁に使うということを明確に示していると思う。それは、イタリア語訳を一種のみではなく五種並べるこの方法の大きな利点と言ってよかろう。イタリア語訳を一種のみ調べただけでは、[表 3] と同程度の確実さをもって結論を出すことは出来ぬはずである。

次に、フランス語の直説法現在形とイタリア語の条件法現在形の意味が重なっていることを示す例を検討する。法助動詞 pouvoir, devoir などを含め、条件法と直説法の比較がしやすい例は少ないが、(28) と (29) を取り出してみた³。

3 (28) (29) (30) ではフランス語原文でもイタリア語訳でも同じ意味を表していると思わせる動詞が現れていたので直説法と条件法の比較がしやすかったが、では次のような例ではどうか。これは無神論者アルマン・デュボアのセリフである。

フランス語原文 Voilà qui me paraît bien contraire aux préceptes évangéliques! 直説法現在形

(貴方が今なさっていることは貴方がいつも偉そうに私に説いて聞かせる) 福音書の教えとは正反対のように見えますな。

(28) certes la bourse des Armand-Dubois, qu'ont surmenées de hasardeuses spéculations, a grand besoin de cette aubaine; 直説法現在形

確かに、いい加減な投資によってすり減ってしまったアルマン・デュボア家の家計はこのもうけ話を是非とも必要としている。

Gi 訳 ha un grande bisogno 直説法現在形

DB 訳 hanno un gran bisogno 直説法現在形

O 訳 hanno ... bisogno 直説法現在形

SV 訳 avrebbe grande bisogno 条件法現在

G 訳 hanno un grande bisogno 直説法現在形

イタリア語訳はすべてフランス語原文に逐語的に対応するイタリア語表現 “avere bisogno di ~” を使っているが、SV 訳のみ条件法現在形にしている。他のイタリア語訳はすべて直説法現在形である。小説の筋のこの時点では、このもうけ話はまだ確定していない。(実際に第一章の終わりでは、このもうけ話は立ち消えになり、アルマン・デュボアは破産してしまう。) 故に、SV 訳は条件法を選んだのであろう。条件法 avrebbe によって「必要としているところではあるが…」という控えめな言い方になっている。これは第一部でみた Mourin と町田の見解に沿う例である。

(29) Plutôt que de prier, vous préférez rester malade? 直説法現在形

貴方は、神に祈るよりもこのまま病気でいた方がまだ、とおっしゃるの？

Gi 訳 lei preferisce 直説法現在形

DB 訳 lei preferirebbe 条件法現在形

O 訳 Lei, ... preferirebbe 条件法現在形

SV 訳 (Voi)preferite 直説法現在

フランス語原文は paraître 「～のように見える」を直説法現在形で使っている。Gi 訳・DB 訳・O 訳・G 訳は同じ意味を表す動詞 parere, sembrare をやはり直説法現在形で使っている。それに対し、SV 訳は以下のようにになっている。

SV 訳 Molto contrario ai precetti evangelici, direi.
それは福音書の教えとは正反対だ、と (私は) 申し上げたいところすな。

すなわち dire 「言う」を条件法現在形で使っているのであるが、これは原文の動詞 paraître とは全く意味が異なる動詞である。もちろん主語も違う。この例をもって、フランス語の直説法現在形とイタリア語の条件法現在形が対応している、と主張するのは強引であろう。このように原文と訳文で異なる意味の動詞が使われている例や、どちらか一方 (あるいは両方) に法助動詞 pouvoir, devoir などを含む例までいれると、筆者の数えたところでは、フランス語の直説法現在とイタリア語の条件法現在が対応している例は合計 11 あった (例えば、(28) では 1 と数え、(29) では 3 と数える)。逆に、フランス語の条件法現在形とイタリア語の直説法現在形が対応する例は 5 であった (例えば、(30) では 3 と数える)。この 11 対 5 というデータの評価は本稿では保留するが、参考までにここに記しておく。

これは無神論者アルマン・デュボアを詰問するセリフである。イタリア語訳では条件法が現れているという点に注目すべきであるが、それについては (30) のところで述べる。

第二部では、ある特定の文法的・意味的環境では、フランス語の条件法は使えるがイタリア語の条件法は使えない、ということを見た。しかし、〔表3〕によると、イタリア語の条件法の方が頻度が高い。つまり、別の文法的・意味的環境ではイタリア語の条件法の方がより頻繁に使われるのだ、と考えねばならない。ここで第一部の内容をもう一度繰り返しておく。Mourin によると、イタリア語では断定を和らげるために他のロマンス語よりも頻繁に条件法現在形が使われ、町田によると、イタリア語の条件法はフランス語の条件法よりも意味的に直説法の領域と重なる部分が多い。これが重要なファクターの一つになっているのは間違いあるまい。

このような条件法と直説法の意味的な重なりは、第二部のように弁別特徴を設定してプラス・マイナスをつける方法では十分に分析できないことであろう。条件法も直説法も同じ環境に現れ得る、ということであれば、同じ弁別特徴を持つ、ということにしかならないからである。そしてイタリア語の条件法の方が頻度が高い、という主張ならまず統計的データによってなされねばならない。

さらに、(29) (30) とは逆の場合を取り上げてみよう。すなわち、フランス語の条件法現在形がイタリア語の直説法現在形で訳されている例を検討する。

(30) Il vous appartient de les rallier aujourd'hui, et vous hésiteriez à le faire? 条件法現在形
 (貴方はキリスト教に反する教えを広めて無数の人々の魂を惑わしてきたのに) 彼らの魂を貴方ご自身の力で正しい道に引き戻すことが出来るようになったこの期に及んで、それをするのを躊躇なさるのか?

Gi 訳	lei <u>esita</u> a farlo?	直説法現在形
DB 訳	(Lei) <u>esita</u> a farlo?	直説法現在形
O 訳	lei <u>esita</u> a farlo?	直説法現在形
SV 訳	(Voi) <u>esitereste</u> a farlo?	条件法現在形
G 訳	lei <u>esiterebbe</u> a farlo?	条件法現在形

これも無神論者アルマン・デュボアを詰問するセリフである。この例に関しては、イタリア語の直説法がフランス語の条件法と意味的に重なっていることになろう。Mourin と町田の見

解の逆を示すこのような例もある以上、「イタリア語では他のロマンス語よりも頻繁に条件法現在形が使われる」あるいは「イタリア語の条件法はフランス語の条件法よりも直説法の領域と重なる部分が多い」と主張するためには、条件法の出現頻度を客観的に示す例えば〔表3〕のようなデータも必要であろう。(もちろん〔表3〕のみで完全な論拠になるわけではないが。)

第二部で見た Squartini の〔表1〕によると、フランス語では推量の意味の条件法は疑問文に現れ得る((8)(13)(15)参照)。ならば(30)の条件法は推量の意味である、としておいてよさそうである。しかし、イタリア語訳の条件法は〔表1〕では捉えられぬ用法ということになろう。(29)のイタリア語訳に現れる条件法についても同様である。第二部の最後に述べたことを思い出していただきたい。このイタリア語訳の条件法現在法は、条件文の帰結節にあるのでもなければ伝聞の意味でもない。ならば推量の一つというべきではないのだろうか。

この問題に関して、まずは〔表1〕がきわめて大まかなパラメーター設定によるものであるから条件法の用法を完全には捉えきれないのだ、と考えるべきであろう。さらに(29)も(30)も相手を詰問する独特のニュアンスのあるセリフであることを考慮しなければなるまい。このフランス語原文の条件法は、口調を和らげる効果を持っているとも思われるし、あるいはかえって皮肉っぽいやい方になっているのかもしれない。やはり、条件法の意味を正確に捉えるには、〔表1〕はより精密に改良していく必要があるであろう。但し、条件法の意味用法の記述を細かくしていけば、当然のことながら〔表1〕の簡明さは失われるであろう。

4. おわりに

本稿では、イタリア語とフランス語の条件法を例として、法の比較を行った。第一部から第三部まで、三つの異なった比較方法を取り上げたが、それぞれの長所・短所はある程度明らかになったと思う。第三部では筆者のデータを提供したが、イタリア語はフランス語よりも条件法を頻繁に使う、ということのみ明らかにできる程度の大きさのコーパスであった。コーパスを大きくすれば、より多くの事を明らかにすることができるであろう。例えば、第二部では、疑問文に現れ得るか、という点が重要なパラメータになっていた。このパラメータを取り入れた上で、さらにコーパスを大きくすれば新たな知見が得られると期待できる。さらには、条件法と直説法未来形との関係を明らかにすることも重要な課題となろう。第二部で紹介した Squartini 2004 はまさにそれが主題となっていたが、本稿ではその課題には踏み込まなかった。今後のテーマとしておきたい。

本稿には、筆者が作った用例はほぼ含まれておらず、また、各用例が正しい文であるのか非文であるのかという判断も、先行研究のものをそのまま利用している。これらの研究成果を提供して下さった方々に心より感謝申し上げる。また、本稿は早稲田大学イタリア研究所主催

イタリア言語・文化研究会の2015年12月5日第141回例会で筆者が発表した内容を拡充したものである。この発表の際に貴重なご意見をくださった方々に感謝申し上げる。

(本学講師＝イタリア語担当)

文献表

Luigi Pirandello, *Il fu Mattia Pascal*, in *Tutti i romanzi I*, I Meridiani collezione, 2005 (1973)

の翻訳：

米川良夫訳, ピランデッロ作『生きていたパスカル』福武書店, 1987.

Henry Bigot 訳, *Feu Mathias Pascal*, Le Livre de poche, Paris, 1968. (1 ed. Calmann-Lévy, 1910.)

Alain Sarrabayrouse 訳, *Feu Mattia Pascal*, Flammarion, 1994.

André Gide, *Les Caves du Vatican*, in *Romans et récits I*, La Bibliothèque de la Pléiade,

Gallimard, 2009 の翻訳：

Gi 訳 Cesare Giardini, *I sotterranei del Vaticano*, Mondadori, 1994 (1933).

DB 訳 Oreste Del Buono, *Le segrete del Vaticano*, Rizzoli, 2006 (1955).

O 訳 Roberto Ortolani, *I sotterranei del Vaticano*, Garzanti, 1965.

SV 訳 Elena Spagnol Vaccari, *I sotterranei del Vaticano*, Feltrinelli, 2007 (1965).

G 訳 Giovanni Gigliozzi, *I sotterranei del Vaticano*, Newton Compton, 1991.

朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社 2002

Robert Martin 1981, Le futur linguistique: temps linéaire ou temps ramifié? (à propos du futur et du conditionnel français), in *Langages*, 64, pp. 81-92.

町田健 1983, イタリア語の「過去未来」について, in 『イタリア学会誌』 n32, pp. 97-116.

Louis Mourin 1956, Il condizionale passato, in *Lingua nostra*, n17, pp. 8-15.

Mario Squartini 2004, La relazione semantica tra Futuro e Condizionale nelle lingue romanze, in *Revue romane* 39, pp. 68-96.

Mario Squartini 2008, Lexical vs. grammatical evidentiality in French and Italian, in *Linguistics*, 46, pp.917-947.

Mario Squartini 2010, Where mood, modality and illocution meet, in Martin G. Becker, Eva-maria Remberger, eds., *Modality and Mood in Romance: Modal Interpretation, Mood Selection, and Mood Alternation (Linguistische Arbeiten)*, de Gruyter, pp. 109-130.

Pavao Tekavčić 1980, *Grammatica storica dell'italiano, vol.2, Morfosintassi*, il Mulino.